

令和 元年 5 月 23 日現在

機関番号：12501

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究期間：2017～2018

課題番号：16KK0024

研究課題名（和文）近代移行期オスマン帝国における個人と社会：エゴ・ドキュメントの研究（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）Individuals and Society in the Early Modern Ottoman Empire: A Study on Ego-documents(Fostering Joint International Research)

研究代表者

秋葉 淳 (Akiba, Jun)

千葉大学・大学院人文科学研究院・准教授

研究者番号：00375601

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 10,100,000円

渡航期間： 9ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究は、エゴ・ドキュメント(自己語り史料)と総称される、書き手自身について書かれた史料に焦点を当て、17から19世紀前半のオスマン社会における個人の経験や主体性、そして社会の変容を探求することを目的とした。その主たる研究成果は、(1)オスマン帝国史におけるエゴ・ドキュメントを調査し、史料全体を概観し、文献目録を作成した。(2)18世紀のある裁判官兼歴史家を取り上げ、彼の自己語りや彼の作成した法廷文書の検討から、その自己表象の特徴を明らかにした。(3)海外共同研究者との共同によるセミナーの開催や国際学会でのパネル組織を通じて、オスマン史におけるエゴ・ドキュメントや社会変容に関する議論を深めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で対象としたエゴ・ドキュメントとは、書き手が自分自身について書いた記録のことで、過去の時代に生きた人々の個人的経験や主観性などを明らかにすることができる史料として、近年注目されている。とりわけオスマン帝国史においては、このタイプの史料は多く知られておらず、研究もまだ少ないため、本研究は国際的に先進的な取り組みである。この研究により、オスマン帝国の社会がより厚みをもって理解されるようになり、他地域・他時代とさらなる比較も可能となる。また、本研究を国際的共同研究として展開したことにより、一定の国際的なインパクトを残すことができた。成果の一部は日本語でもWeb上に公開している。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to investigate individuals' experiences, individuality, and social transformation in the Ottoman Empire during the seventeenth and the early nineteenth centuries through the study of ego-documents or self-narratives. As the main results of this study (1) I made an overview of Ottoman ego-documents and published a bibliography; (2) I explored the self-representation of an eighteenth-century Ottoman historian-cum-judge by examining his self-narratives and the legal documents he prepared; (3) I organized a seminar series and a panel in an international meeting with my joint researcher to deepen the discussion about the Ottoman ego-documents and social transformation.

研究分野：アジア・アフリカ史

キーワード：オスマン帝国史 エゴドキュメント 自己語り史料 近世史 知識社会史

1. 研究開始当初の背景

本研究は、基課題となる基盤研究(B)「17～19世紀オスマン帝国における近代社会の形成」(平成26～29年度)の研究のサブテーマの一つであった、18世紀における文字文化・書く文化の裾野の拡大をめぐる問題を、エゴ・ドキュメント(自己語り史料)と総称される、書き手(語り手)自身について一人称で書かれた史料に焦点を当てて発展させようとするものである。このタイプの史料は近年、ヨーロッパ史研究を中心に関心が高まっているが、オスマン帝国史研究の分野においては、本国際共同研究の海外共同研究者であるC・カファダル教授が1989年に発表した先駆的な論文が、16～18世紀のオスマン社会で書かれた自己を語るさまざまな史料の存在に光を当てた。その後21世紀に入ると、ヨーロッパにおける研究の進展に刺激されて、中東・イスラーム史の分野でも多様なタイプの自己語り史料が発掘され、研究されるようになった。本研究代表者も、基課題の一環として2014年にオスマン帝国史におけるエゴ・ドキュメントの研究に着手し、18世紀末～19世紀初頭にイスタンブル及びサラエヴォでそれぞれ書かれた「日記」と「年代記」を取り上げて、自己の語られ方や都市の記憶について考察を加えた。これを出発点とし、エゴ・ドキュメントを通じてオスマン社会における個人の経験、主体性を探求する研究計画を立案するに至った。

2. 研究の目的

本研究は、オスマン社会における書く行為に着目して、17世紀から19世紀前半のオスマン社会における生きられた個人の経験、個人の主体性を探るとともに、それを通じてオスマン社会の変容を明らかにすることを目的とする。18世紀オスマン社会における文字文化・書く文化の裾野の拡大をめぐる問題を、エゴ・ドキュメント(自己語り史料)と総称される、書き手(語り手)自身について一人称で書かれた史料に焦点を当てて発展させようとするものである。オスマン帝国史における自己語り史料研究の先駆者の一人であり、オスマン帝国史研究を牽引するハーヴァード大学のジェマル・カファダル教授を海外共同研究者として、オスマン帝国社会における「個人」、「自己」、「主体」といった問題を、17～19世紀のオスマン社会の変容という文脈に位置づけて探求することが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

- (1) データベースの作成。オスマン帝国史におけるさまざまなジャンルのエゴ・ドキュメントの情報を収集し、文献目録を作成する。
- (2) 資料調査。ハーヴァード大学図書館、トルコおよび近隣諸国の図書館等で文献調査を行う。
- (3) 個別研究。特定のエゴ・ドキュメント史料を使って、オスマン社会における個人の経験や主体性といった問題を検討する。
- (4) 比較研究。エゴ・ドキュメントのいくつかの事例を相互に比較検討する。
- (5) セミナーの開催、国際学会でのパネル組織などを通じて成果を公表するとともに、広く議論を行う。

4. 研究成果

(1) オスマン帝国のエゴ・ドキュメントの概観
共同研究者の助言も得ながら、オスマン帝国史において存在の知られているエゴ・ドキュメント史料の情報と、それらの史料を用いた研究文献を収集、整理した。まず、2017年10月29日に開催された日本オリエント学会第59回大会にて、オスマン帝国史におけるこのタイプの史料とそれを用いた研究を概観し、研究の方向性を考察する学会発表を行なった。そこでは、エゴ・ドキュメントを日記、自伝的記述・回想録、捕虜の手記、書簡、旅行記、同時代史、覚書・書込み・雑録類、断片的な自己や自己の経験・回想への言及、夢の記録に分類して、さまざまな種類の史料の中に「私」を見出しうることを示した。また、専門的書記が定型句を駆使して記述する嘆願書や法廷文書をこの種類の史料として扱うのは難しいが、皇帝の宸筆(hatt-i humayun)や非公式の日録(ruzname)などは自己語りの要素を含む場合があることを指摘した。一方、ヨーロッパ史との比較では、ヨーロッパで“family book”として知られる、複数世代にわたって書き留められた家族の誕生、結婚、死亡などの記録は、オスマン帝国には独立した帳簿としては見出されていないが、雑録の中にその種の記録が存在する可能性があることに言及した。

この史料類型を生かすことができるアプローチとしては、(1)オスマン社会における「自己」「個人」の探究、(2)個人の日常的な人間関係やネットワーク、あるいは人々の日常的な関心事や親密圏の研究、(3)自己を語る／書く行為そのものについての研究(リテラシーをめぐる問題にもつながる)、(4)感情や感覚という領域、(5)ジャンルあるいは形式の問題、を挙げた。

以上の報告を基にして、Web上の「オスマン帝国史料解題」(東洋文庫イスラーム地域研究資料室HP内)に「エゴドキュメント／自己語り史料」の項目を執筆し、これに刊行史料と研究所・研究論文の文献目録を付し、公開した。

(2) 史資料調査・収集

刊行史料・文献の調査はハーヴァード大学図書館で遂行することができたが、一次史料については、クロアチアとトルコの図書館で調査・収集を行なった。クロアチアでは、ザグレブ国民及び大学図書館にて、サラエヴォに居住していた裁判官ムスタファ・ムヒッピー(1854年没)

の残した雑録などの資料を閲覧し、一部を複写した。先行研究のパイチ=ヴキッチが使っていない部分があることを発見したのが収穫である。イスタンブルでは、スレイマニエ図書館、大統領府オスマン文書館、イスラーム研究センター図書館で関連する史資料の調査・収集を行った。滞在中にはトプカプ宮殿附属図書館に複写申請を行ない、セイイド・ハサン(17世紀)の日記や、シェムダーニーザーデ・フンドゥクルル・スレイマンの歴史書の写本などの複写を入手した。

(3) オスマン朝裁判官のエゴ・ドキュメントに関する研究

まず、オスマン帝国の裁判官によるエゴ・ドキュメントが多く存在することを確認した。日記、捕虜の虜囚記、詩、歴史書、雑録など史料類型として多岐に亘るのでこれらがまとめて論じられたことはなかったが、裁判官のエゴドキュメントとして並列させて考察することも有意義であると思われる。これについては今後の課題となるが、本研究では、18世紀の裁判官かつ歴史家シェムダーニーザーデ・フンドゥクルル・スレイマンを採り上げて検討した。彼の著した歴史書には随所に自己の経験や所感が書き込まれており、一種のエゴ・ドキュメントと言えるものであるが、その歴史書に異なるヴァージョンが2点あることを発見し、そこに異なる内容の自己語りが含まれていることを確認した。それらの記述から、初期の草稿では著者の歴史家としての強い自覚が表現されていること、それに対して完成稿では公正な裁判官としての自己表象が前面に出ていることを見出した。そして、彼が裁判官として赴任していた時期の法廷台帳を参照してみると、一般的に没個性と思われるがちな公文書にシェムダーニーザーデの個性や自己主張が読み取れること、それは歴史書に見られる彼の自己表象と一致することを明らかにした。この成果は、2019年4月のハーヴァード大学でのセミナー及び、同年7月の中東研究世界大会(セビーリヤ)で公表し、また日本では帰国後の同年11月に東京大学東洋文化研究所定例研究会で発表した。

裁判官とは別に、オスマン社会における捕虜の虜囚記の研究も開始した。このテーマについては、韻文及び散文の7点の虜囚記の存在を確認し、これら全体を採り上げ、内容の比較などを行なうことは今後の課題となる(現在進行中)。

また、カファダル教授と未刊行の日記を現代トルコ語表記に転写して刊行する企画について合意し、具体的な計画を策定中である。

(4) セミナーの開催、国際学会でのパネル組織

共同研究者のカファダル教授とともに、ハーヴァード大学中東研究センターでセミナー“Sohbet-i Osmani”を2019年4月に5回開催した。B. ドゥマーニー氏(ブラウン大学、4/9)、守田まどか氏(東京大学・イエール大学、4/12)、N. テクギュル氏(ビルケント大学・ハーヴァード大学、4/16)、秋葉(4/23)、T. シェン氏(コロンビア大学、4/27)がそれぞれ報告し、討論を行なった。報告のテーマは、エゴ・ドキュメントを生み出した社会背景(社会関係)を扱ったものや、エゴ・ドキュメントの内容と密接にかかわる感情の歴史や占星術(人々が行動の指針にし、日付や時刻を記録することと関係していた)などについてであった。

2019年7月にスペインのセビーリヤで開催された第5回中東研究世界大会に、カファダル教授とともに「近世オスマン社会における自己表象」と題するパネルを組織して参加した。報告者は、カファダル教授と秋葉の他に、T. デイルメンジ氏(ハジェテペ大学)とS. カラハサンオール氏(イスタンブル・メデニエト大学)の計4名で、それぞれが、17~18世紀を対象として、オスマン帝国の人々による自己表象、自己語りについて論じ、討論を行なった。全体として、オスマン帝国における自己語り史料の研究の重要性が再確認され、とりわけ17~18世紀に経験的知識を重視する態度が広まったことと一人称叙述の使用との関係性がカファダル教授によって提起された。

セミナーの企画やパネルの組織、そしてハーヴァード大学での研究活動を通じて、数多くの研究者との交流も行なうことができ、研究のネットワークをさらに広げることにつながった。このネットワークは今後の共同研究の基礎となるもので、これも本研究の成果の一つである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者は下線)

[雑誌論文](計0件)

[学会発表](計4件)

秋葉淳「歴史書と法廷文書から「自己」を探る:18世紀オスマン帝国のある中級裁判官のライフヒストリー」東京大学東洋文化研究所第4回定例研究会, 2018.11.8.

Jun Akiba. “Seeking Selves in Ottoman Archival Documents: Semdanizade Findiklili Suleyman and His Court Records.” Fifth World Congress for Middle Eastern Studies (国際学会), Seville, Spain, 2018.7.19.

Jun Akiba. “Writing History, Writing Documents: Self-representation of an Eighteenth-Century Ottoman Historian-cum-Judge.” CMES Sohbet-i Osmani Lecture Series, Cambridge, MA: Harvard University (国際学会), 2018.4.23.

秋葉淳「オスマン帝国史におけるエゴ・ドキュメント研究の展開と展望」日本オリエント学

会第 59 回大会 (東京大学), 2017.10.29.

〔 図書 〕 (計 0 件)

〔 産業財産権 〕

出願状況 (計 0 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
出願年 :
国内外の別 :

取得状況 (計 0 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
取得年 :
国内外の別 :

〔 その他 〕

ホームページ等
オスマン帝国史料解題「エゴドキュメント/自己語り史料」
<http://tbias.jp/ottomansources/ego-documents>

6 . 研究組織

研究協力者

〔 主たる渡航先の主たる海外共同研究者 〕

研究協力者氏名 : ジェマル・カファダル

ローマ字氏名 : Cemal Kafadar

所属研究機関名 : ハーヴァード大学

部局名 : 文理学部歴史学科

職名 : 教授

〔 その他の研究協力者 〕

研究協力者氏名 : 守田まどか

ローマ字氏名 : Madoka Morita

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。